別13
60
1



牝が斯くなれば死一生の苦労をしてゐる傍に牡は知らぬ顔をして平気で、全く自分の知らぬ事ばかりやア無いといふやうに楽々と寝て居るばかりやアありませんか。私、男てものは全体斯うした残酷なものだと傍々知りました。本當に嘆かしつて憎くなりました。不、堅爾さん、嬢の結果が伊ずこんな悲惨な苦みを見なきやアならんものでせうか。あんな動たびも虫にびも存在する彼んな汚い悲惨な残酷な行為が伴はなければ癒ばやア無いとえゐならば、



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1



私は恋を呪います。恋！神聖な清い恋は人間ばかりの有つてるものです。私は其の神聖な清い恋に憧憬れてゐるのです。あんな悲惨な邪道な恋を犯さないで清い美しい恋に私の魂を捧げて見たいのです。不、堅固さん。あなたと私と唯ッた二人ッ切りで、あの椿瑰の境内で椿の実を拾つて、あの石殿の所で小い石の凹みへ夫れを宝れて、お餅搗をして遊んだ頃の、あの清ういい心、其心の進化した、情熱に燃えた恋が、今一度出来ない筈はありま



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1

322

二行アキ

せん。ネ、堅ちゃん！正

時子はトロンとした眼で堅爾の顔と凝かつと

見詰めて居たが、瞬かつて両の眼には涙さへ鈍に浮

んで来た。

時計は四時を打つた。

二人は朝の七時に七條驛へ降りた。都ホテ

ルの出張店で朝餐を濟ますし、驛前から蹴上

行の電車に乗つて其の終点で降りた。そして

（原稿二〇字詰横書）

別13
60
1



其所から途を訊きく比叡山へ登つた。

時子は護謨草履を新聞紙に纏んだ上を手巾に包んで無雑下げ、茶屋で買つた草履を穿いて建者に守られた。

渓に沿うて山又山を分登つて行くと、一軒の茶店とも付かぬ家があつて、七十ばかりの爺さんが汚ない箱に駄菓子を列べて番をしてゐた。

時子は煙草の煙が先だらけな毛氈をかけた床机に腰を卸して、額から〳〵流れる汗を



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1

324

拭き〳〵、節さんが汲んで出した茶渋(あしぶ)からけの産婆を詰取(うけとり)つて、

「お布さん、此(こ)の気は泊(とま)つてみるのつて。」

「いゝえ、俺(ぢ)ア二十日下の里(さと)から已(み)の日だけ上つて来るんです。先祖(ぢんさま)から辨天様の御孝行(かう)して来てゐるのです。此の茶釜(ちやがま)を見さつしやい、寛永二年正月已(み)の日と書いてある。寛永二年といやア三代将軍様時代で、今から二百四十五年前ですぜ。」

「然(さ)う？　二百四十五年も、御奇特なわ(きとく)ね。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
1

325

「と時子は着物の汗を拭き乾らせて言つた。

「此寺の辨天様は巳の日が命日で、寅の日は毘沙門、土用の丑の日は鰻を食べる日で……」と老人はいつぺこぺ食つて居たが、鰻つて何子を使つて居た堅面は、

「行かうや、ぽつ〳〵。」とそこを立つて行机を離れた。時子は白銅一つを帝と盆の上に載せて置いて出て来た。

少し行くと小い天満宮の祠があつて小女生徒の清書が何十枚も萬國旗と飾つたやうに釣

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1



されて居た。

四日市の教育はマダ寺子屋式だなア、今に斯んな下らない四角な字を骨折つて習つてるんだからなア。

壁面は洋傘の先で甚の一枚をぷつりと突破つた途端、エヘヘと咳嗽の声がして薄汚れた浴衣を着た四十恰好の男が襖の後から顔を出した。二人は周章て、逃き出した。そして紆々した坂を汗みどろになつて漸と根津中堂まで登つた時は紺碧の一時であつた。



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1

327

文珠堂や大誦堂、戒壇堂、大乗院などを覗いて、家庭で晩食をしたのは二時頃であつた。

家庭の「辯慶」という黒犬が時子の裾に纏はつて戯れるので、時子は向付の塩焼の鯛をソツクリ投げて與つた。

「これから石山へ行かう？」

「えエ、参りますわ。」

「異國々々して居ると眠くなつて来るから、もう直く行かう！」

堅雨は先に立つて坂路を降りた。そして坂

中央(10)(原稿用紙)(昭和)

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1

328

本まで来たが、小蒸汽に乗換えたので楽座の
席几で一時間ありまり所待をした。
堅面は机の上でウトくしたが、到頭高
鼾で眠てゐつた。時子は扇子で堅面の顔に群
る蝿を追ひ払ひ種々の想像に耽つた。男子と
いふものは弱いと甚の浅ましい姿が頼りに幻
のやうに彼女の眼の前にちらついた。
甚うちは蒸汽が来たので、大津の町に一
駅りして京の三本木の信楽に着いたのは、も
うトップリ日の暮れた頃であつた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1

草臥れた〳〵、隨分引張り廻されたもんだ。夕立旅行はもう懲りごりだ。

堅爾は風呂から上つて来て胡坐をかきながら怒鳴つた。

昨晩、私の講義が長かつたもんだから、

堅爾は免なさいネ。

時子は婚約と笑いながら下女に案内されて

依宅〳〵行つた。そして帰つて来て見ると、堅爾は既に麦酒を矢鱈早に三本も空けて、眼はトロ〳〵と安味を帶びて居た。時子が食事の



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1

330

酒も酒には酔ってみた。

四請我は師兄だよ。中学、高等部、ハイスクール、カレッジ、もう長年レクチュアに飽きなしてるんだから、時々さんの愛者哲学のち講義も妻子ち預けに致すよ。夫れより也貴が米国でペルシヤ人の娘と……面白いロマンスがあるんだ、夫れでも国にして居れば、今晩は……

堅雨は時子に捉ちれかゝつて其の頸のあたりを無闇に撫で廻しも居たが、脇を松に

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13
60
1

一行アキ

ぐっすりと寝込んで了った。

翌朝眼を覚ましてみると堅雨の枕もとには一通の手紙が置かれてあった。堅雨は慌ててはね起きようとしたが頭がぎくぐくと痛むので、眉根を寄せながら手紙を披いて見ると、

堅ちゃん、左様なら。

暫くお眼にかかりません。

私の哲学を軽蔑なさらないで下さい。

と書いてあった。堅雨はムックリと起き直

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

つて暫く其の手紙を見詰めて居たが、丁度女中が入つて来たので、

「おイ、時子さんは如何したの？」

「お伸れ様ですが、あのお方は昨晩十一時にお帰りになりました。」

「昨晩十一時に？　何所へ行くと言つたかい。」

「何にも仰しやいませんでした。」

「然うか。」と言つて堅雨は悔恨の情に堪へ兼ねて涙ぐんだ。然して考へ込んでしまつた。

別13
60
1

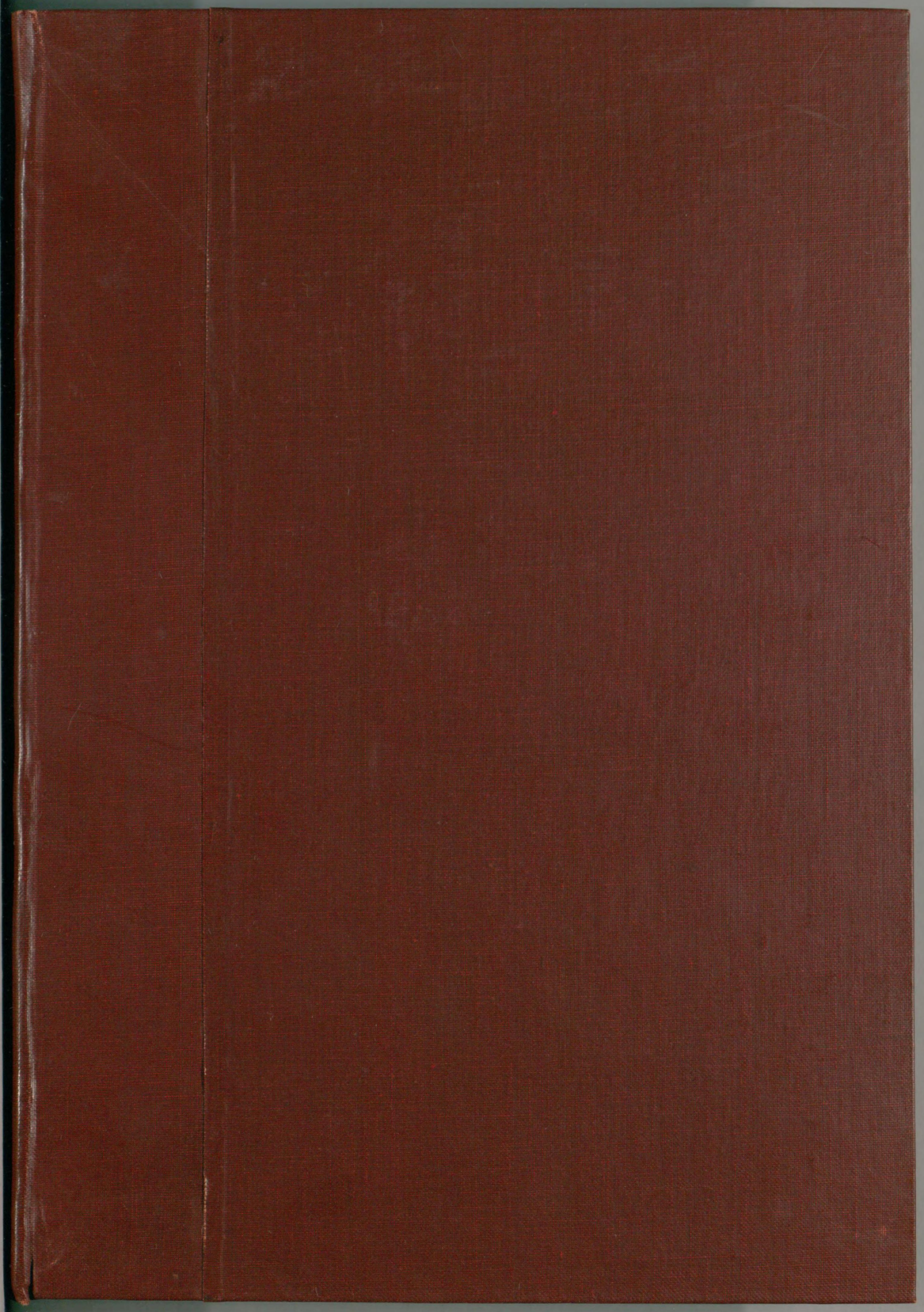
国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別13
60
1

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用